



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／人間・環境学研究科
Faculty of Integrated Human Studies / Human and Environmental Studies

No.

64



2020.3

総人・人環 広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

ねこはねこらしく	松田 英男.....	2
学生たちとの思い出	岡田 温司.....	4
もうすぐ半世紀	水野 尚之.....	6
在職期間を振り返って	服部 文昭.....	8
日本史授業四半世紀	元木 泰雄.....	10
魔法の世界を出ていく私	水野 眞理.....	12
ダジャレの人類学	宮川 禎一.....	14

新任の先生方より

トラウマに対処する	TAJAN, Nicolas Pierre.....	16
(自己紹介に代えまして)		
～理論と実験の両輪で科学する～	松永 利之.....	17
化学でアートする	鈴木 雄太.....	18

ご退任を迎えられる先生方から

ねこはねこらしく

松田 英男

(総合人間学部 人間科学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻)



タマとチビ

『京大教養部報』No. 194 (1991年3月刊) から

1981年の春に大学勤めを始めてから39年が過ぎようとしている。大阪の公立大学（堺市）が振り出し。当時は南海球団がまだ生き延びており、駅前には中百舌鳥球場（二軍の本拠地）があった。難波の大阪球場ももちろん健在で、たびたび足を運んだ。大学院を終えたばかりの身で、教育については塾・予備校以上の知識は無かったが、のどかな時代ゆえ、特に縛られずに、自由に模索しながら取り組んでいた。その後、大阪のもう一つの公立大学（大阪市住吉区）を経て京大に戻ったのが1990年の秋。それから30年近い歳月が流れた。

着任の挨拶として、当時の『京大教養部報』（『総人・人環広報』の前身。吉田南図書館の地下書庫の片隅にひっそりと所蔵されている。製本もされておらず、紙のファイルでまとめられている）に、こんな文章を書いていた。

「母校の自由な空気の中で、伝統を追い求めつつ、猫的人生を全う出来たらと、のんきなことを考えているのが、正月気分の抜けない私である」（＊刊行は確か3月。お屠蘇気分が長過ぎである）。

「伝統」云々はともかく、構内で猫たちに話しかけている私の姿を見たことのある方は、「猫的人生」を全うしているじゃないかという印象を受けるかもしれない。忙しく、しんどいときも多かったが、長い年月を経て、近頃は昔に戻ったような気がしている。家の愛猫チャット（チャトラン）やシロ君をはじめ、吉田南図書館のニャジー（猫サークルではもんちゃんと呼ばれている）とチビクロなどなど、長い付き合いの猫たちも多い。それぞれに個性的なキャラクターで、心和む存在である。

人環では「共生人間学専攻、人間社会論講座、文化社会論分野」所属だった。「人間」「社会」「文化」はともかくとして、「共生」には共感できた。本来の意味はおそらく違うだろうが、「共生」は、私にとっては、人間とそれ以外の動物たちとの間のあるべき関係を意味するようになった。地球が

宇宙の中心ではないのと同様、人間は地球の主な
どではない。どの子の生命も人間ひとりひとりと
同じように大切なのだ。

私の専門は、もともとイギリス小説であった。
やがて、映画論が中心となり、アメリカ映画、イ
ギリス映画を研究するようになった。女性映画、
ミュージカル、フィルム・ノワール、そしてアニ
メーション映画が対象である。その関係で、先年
早期退職された加藤幹郎先生とともに、日本映画
学会の設立、運営にも深く関わることになった。
およそ似合わない事務局長、そして会長を務めたり
もした。4月以降、京大でも授業があり、他校
での仕事もあるものの、校務からは概ね解放され
るので、映画道の探究を進めていきたいと思う。
なかでもアニメーション映画における動物の表象
は、心ひかれるテーマである。無理せずに、自分
らしく。人間社会に縛られない、「猫的人生」を全
うしていきたい。そして、京大もまた、他大学に
はない、自由で心和む空気を守り続けて欲しい。

(まつだ ひでお)

ご退任を迎えられる先生方から

学生たちとの思い出

岡田 温司

(総合人間学部 人間科学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻)



身から出た錆とはいえ、最後の年度に九本の博士論文の審査というのは、さすがに疲れた。論文博士ひとつ、課程博士の主査六つ、副査二つというのが内訳。そのほとんどに副査として付き

合っていたいた創造行為論の同僚、栗山智成さんと武田宙也さんには感謝の言葉もない。ここ数年来、博論を提出予定の学生には、くれぐれも最後の年に固まらないようにと忠告し、彼らもまたそれにある程度まで応えてくれてもいたのだが(どの年度に提出するか内々で相談して調整してくれていたようだ)、やはり最終年度は予想を超える数になってしまった。

とはいえ、これはもちろん、学生の側ばかりではなくて、指導の至らなかったわたしの側の問題でもある。それでもまだ数人の博士後期課程や修士課程の学生のことは心残りで、間接的にせよ、求められるなら、彼らの研究の進展を何らかのかたちで見守っていききたいと思う(西洋の大学では、退官後の教員が残してきた学生を指導できる制度が整っていると聞かすが、このことは今後、日本でも検討される余地があるのではないだろうか)。

おこがましくも「学生の指導」などと、ふと口が滑ってしまったのだが、実のところ、わたしのほうがむしろ学生から多くのことを教わってきた

というべきである。それゆえ、ともに学ばせてもらった、という表現がもっと的確かもしれない。

本来わたしの専門は西洋美術史なのだが、イタリアにかかわる教員が他にいないことも手伝ってであろう、いつのころからかイタリアつながりでわたしの研究室を受験してくる学生も現われるようになった。無事に院入試をクリアし、研究への意欲にもあふれる彼らを、専門が違うという理由だけで拒むのははばかられたうえに、そもそも領域横断性あるいは学際性というのが当初から本大学院研究科の謳い文句だから、いやしくもそれを尊重するなら、自分の専門領域のみに固執することはフェアな態度ではないだろう。しかも、おそらく学生もそのスローガンに惹かれて受験したのだとしたら、その期待にできるだけ応える必要がある。

かくして、気づいてみるとわたしの研究室には、西洋美術史や芸術学の学生ばかりではなくて、イタリアを中心とした哲学や文学や現代思想、建築や軍事史、音楽や映画、日伊文化交流史、さらには移民問題に関心をもつ学生たちまでもが集まるようになった。そのなかには、わたしとほぼ同年代か年長の人生の達人たちもいて、わたしの目の届かないところで、若者たちの良き相談相手になってくれていたようだ。

したがって、ゼミでもおのずと、研究領域の異なる学生たちが議論を戦わせることになるが、わたしはそのハイブリッドさをむしろ気に入ってい

たし、彼らもまた互いに刺激し合っているように（少なくとも表面上は）見えた。無軌道で統一性も一貫性もない、といったそしりを受けるかもしれないが、そうやって現在に至ってきたというのが偽らざるところである。何よりもうれしいのは、それぞれの分野で活躍し、評価も受けている研究者たちが育っていったことである。

曲がりなりにもわたしがこれまで、西洋美術史という枠組みにとらわれないで仕事をしてこられたとしたら、それゆえ、他なるものへと、外へと絶えずわたしの目を開かせてくれた彼ら学生たちのおかげである。二十数年を振り返りながら、いまわたしは改めてそのことを身に染みて実感させられている。

学生たちとの忘れられない思い出もたくさんある。なかでも何度かのイタリア旅行はいつも脳裏に焼き付いている。各都市の美術館や教会堂、遺跡や名建築を訪ねてイタリア半島を縦断したことも一度や二度ではないし、シチリア島を一周して、古代ギリシアとイスラームの遺産が大自然のなかに溶け合う光景も、彼らと共有してきた。イタリアの町には歩くことの楽しさと驚きがあふれていて、一日で二十キロ近くも石畳を踏みしめて、みんな疲労困憊したこともよくあった。

さらに、ローマ大学トル・ベルガータの旧友ジュゼッペ・パテッラ（彼には本研究科の客員教授として学生の指導に当たってもらったこともある）との共同で、わたしの院生十名ほどと向こうの研究者たちとで二日間にわたってシンポジウムを開催したこともまた懐かしく思い出される。ローマ近郊のフラスカーティの丘は、古来より風光明媚な白ワインの名産地で、シンポジウムが終わるとみんなでこぞってそこに繰りだして安価な美酒に浸ったものだ。もちろん、この国のことだから盗難や詐欺まがいの「洗礼」をまったく受けなかったというわけではないが、それもこれもいまと

なっては笑い話の種である。

とはいえ、わたしが歳をとったせいもあって、近年はごくまれにずっと小規模で短期間、たとえばヴェネツィア・ビエンナーレを訪ねるという旅のかたちに変わってきた。学生たちから「イタリアに行きましょう」と促されても、二の足が踏まれるのには、わたしの加齢にも原因はあるが、ますます強くなっていくように思われる大学の管理体制に心がくじけてしまう、という自分の不甲斐なさも手伝っている。昔はよく、ゼミが終わると研究室で飲み明かしたものだが、それもここ二・三年とみに少なくなった。

オフレコで告白するなら、「パスタ・パーティ」と称して（僭越ながら、わたしは料理が大好きで、研究と料理とのあいだには、素材をいかに処理するかという点で大きな共通点がある、とずっと考えてきた）、研究室で何種類ものソースをつくってアルデンテに茹で上がったばかりのパスタと和えて学生たちと賞味し歓談するのが毎年の恒例になっていた時代もある（そんなに昔の話ではない）。このささやかな「パスタ・パーティ」のことを懐かしんでくれる学生たちのいることも、わたしにとって貴重な宝のひとつである。この間、大学の雰囲気も随分変わってしまった。まるで肅清のごとくタテカンが一斉にキャンパスから締め出され、弱い立場にある学生すらも訴えようとするこの摩訶不思議な現在の京都大学は、いったいどこに向かおうとしているのだろうか。

最後になってしまったが、ケータイやスマホとはいまだにずっと無縁で、コンピュータ上での事務処理もはなはだ苦手な現代の「難民」を、長らく支えてくださった同僚の先生方、そして誰より事務の皆さんに、心よりの感謝を申し上げてこの駄文を閉じることにしたい。本当にありがとうございました。

（おかだ あつし）

ご退任を迎えられる先生方から

もうすぐ半世紀



京都大学にほぼ半世紀
いました。自分でも信じ
られない長さですが、そ
の中でも強く記憶に残っ
ていることを書いてみま
す。18歳で文学部に入学
しました。高校時代に明

治や大正の文豪の名作をたくさん読み（それなりに「国語力」はアップしたようでした）、日本の古典や漢文も結構好きで、また英語はZ会初段（今でもこの称号はあるのか知りませんが）になっていましたので、それなりの自信をもって入学しました。しかしそんな自信は入学後すぐに吹っ飛びました。文学部の「国文」の先輩たちは、活字になった古典などではなく、手書きの文字を読んでおられ、お寺から発見された古文書なども読めてしまうのでした。また、大学で英語のテキストを読み始めると、受験時代に上達したと思った英語が実はスラングや頻度の低い語を平易な語に置き換えた人工言語であったことが分かりました。その上、読み書きに特化した受験英語ばかりを勉強していた私は、リスニングやスピーキング能力が恐ろしく貧弱でした。クラスに一際目立つ女子学生がいました。美しく、気位が高く、英語の発音が飛びぬけて native speaker に近く聞こえました。当時は double school などという言葉が流行っていて、私も三条寺町近くの YMCA で「英会話」を学び始めました。Placement test があり、ほと

水野 尚之

（総合人間学部 人間科学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻）

んど聴けない話せない私は一番下のクラス、例の彼女は最上位のクラスでした。また、キャンパスには政治に目覚めた人がたくさんいて、地方出身者の私は自分の無知や無関心をいつもなじられているように感じました。

大学の「英語」のクラスは刺激がいっぱいでした。中でも K 先生の印象は強烈でした。1 回生の「英語」のクラス授業で Noël Coward の風習喜劇 *Hay Fever* を読ませるとは！ イギリスの大人の会話の面白さや淫らさを垣間見る思いでした。（どこまで理解できたかは怪しいですが。）日本のお茶の作法を英語のテキストにして、学生から「こんなものを読んでも仕方がない」と批判された先生は、「それは君の読み方が悪いからだ」と仰ったそうです。先生の一言一言が明晰で、心に残ります。

二回生の終わりごろだったと思います。出会ってしまいました。ヘンリー・ジェイムズです。しかもその作家の翻訳の大家がこの大学におられました。やたら難解だが、絶対読み解けるはずと思わせる入り組んだ英文。どこかフランス文学の香気を漂わせる美しい翻訳。私はこの大家のもとでこの作家を研究すると決めました。（あとから考えると怖ろしい決心でした。）大学院の修士課程、博士後期課程でもヘンリー・ジェイムズを中心に研究しました。偉大な師匠の弟子であることは、はじめは嬉しく誇らしいのですが、だんだん苦しくなってきます。いつまでも師匠の真似をしている自分とは一体何なんだろう、と自問しはじめまし

た。

博士後期課程時代にニューヨーク市立大学へ留学しました。大学に寮などはなく、ニューヨークの市内に下宿しました。昼間は学部、夕方からは大学院の授業が行なわれましたので、毎日、夕方まで時間が空いています。Assignment（要するに授業前の課題図書）はたっぷりありましたが、時間の使い方次第で結構自分の好きなこともできました。毎週末、オフやオフ・オフ・ブロードウェイの劇（そこそこ安く観られます）を観に行き、封切り映画やレトロ映画もたくさん観ました。日本人がいない環境で、授業でのディスカッション、新聞、雑誌、テレビ、演劇などを通して常に英語に接し、しょっちゅう課される英語のレポートを必死で書いていると、我ながら英語に慣れてきました。苦手だったリスニングやスピーキングも次第に楽になりました。夢の中でも自分が英語で話している時が多くなりました。

京大の大学院に戻ってしばらくした時、あのヘンリー・ジェイムズ研究の大家が定年を待たずに京大を去られました。そのころから私は、師匠が訳されていないヘンリー・ジェイムズの作品を訳しはじめていました。師匠のことはできるだけ意識しないようにしました。また、作品に描かれている現地へ行き、できる限りの情報を得たうえで翻訳する、というやり方を徹底しました。現地での意外な発見が続き、人間関係も広がり、独り立ちした私に勇気を与えてくれました。（どんな発見があったかは、翻訳・出版した作品の「あとがき」や「解説」をお読みください。）

その後、大阪の女子大学の講師を経て京都大学教養部に採用されましたが、大学の改組も大きな転機でした。毎週5コマの「英語」を担当するだけだった英語の先生が、総合人間学部、そして大学院人間・環境学研究科の教員になったのです。間もなく、優れた学生が次々に入ってきました。

彼らに論文を書かせ、学会で発表させ、アカデミックな世界に船出させなければなりません。そのためには私自身が学会である程度の位置に立たなければ！ 私の生活は一変しました。いや、怠惰で自己中であった私の体質が変わった、と言うのがより正確かもしれません。続々と来日する外国人研究者の講演や滞在を京大でお世話をする機会も増えました。院生諸君だけでなく、私自身に対する仕事のオファーも増えてきました。……こうして、充実しすぎる教育（と研究）の嵐のような日々を送るようになり、気がついたら定年を迎えていました。京大での教育者としての生活に終わりが来たのです。面白さがやっと分かり始めた自分の研究に集中せよ、という天の声が聞こえてきます。

最後にもうひとつ。60歳からフルコンタクトの空手を習い始めました。自分の中でまだ使っていない部分、つまり肉体や闘争本能といった最後の秘境の可能性を試そうと思ったのです。普通ならあり得ない年齢での無謀な試みであることは承知の上です。すぐに身体のアチコチが悲鳴を上げ始めました。しかし絶対に辞めないと心に決めて入門した私の心が折れることは、一度もありません。痛む膝をかばいながらの歩行は、すぐにまわりの人たちに気づかれました。でも構いません。私は道場の畳の上では格闘家に変身するのです。京大に入学した時以来宿命のライバルとなった女性は、私のこの変身ぶりにはさすがに驚いたのか呆れたのか、何も言いません。ただ、私の昇級試験の組手（試合）を見に来てくれ、「自分の打撃にうっとりしている」など厳しいコメントをくれます。

2020年3月末、約半世紀を過ごした京大をとうとう去りますが、私の旅は続きます。

（みずの なおゆき）

ご退任を迎えられる先生方から

在職期間を振り返って

服部 文昭

(総合人間学部 認知情報学系／

人間・環境学研究科 共生人間学専攻)



私は、平成3(1991)年10月1日に、京都大学の教養部に助教授として着任しました。まだ、「国立大学」であり、所管は「文部省」の時代でした。教授の辞令は文部大臣名で、助教授は京大総長の名で交付されていたところで、私は、教養部長の木下富雄先生から辞令を手渡されました。以来、いわゆる一般教養教育のロシア語を教えてきました。その当時、ロシア語の「教官」は、教養部の「中露語教室」というところの所属でした。ロシア語は、一時、三名の時期もありましたが、私の着任直前は、中国語が二人、ロシア語も二人の体制でした。私が来たことで、ロシア語が三名になりました。ただし、私は「臨増定員」と俗称されていたポストによる着任で、ロシア語教官三名が固定化されたわけではありませんでした。事実、その後、中国語とロシア語の分離など数度の組織改編を経ましたが、ロシア語のポストは減るばかりで、平成25(2013)年度からは、ついに、私一人となってしまいました。

私の着任当時は、ロシア語は、週に20コマのクラスが設けられ、五人前後の学外非常勤講師の先生方もお願いしていました。ところが、履修学生数の減少と教員の削減とあいまって、現在では週に8コマという状況になってしまいました。学外の非常勤講師の先生方も、今ではロシア人ただお一人です。

新入生が選ぶ一般教養教育の外国語は、世界情勢の影響を大きく受けてきました。なかでもロシ

ア語ではそれが顕著でした。1957年10月、ソ連がアメリカに先んじて人工衛星スプートニクを打ち上げたこと(スプートニク・ショックと言われました)から、理科系を中心にロシア語ブームが起きました。その後、東西冷戦やソ連のアフガニスタン侵攻などで、ロシア語履修学生数は低迷を続けましたが、ソ連末期、ゴルバチョフ書記長の「ペレストロイカ」をきっかけに、再びロシア語の大きなブームが到来し、私の「臨増」もその余波とも言えましょう。しかし、その熱も冷め、追い打ちをかけたのが国立大学の法人化に始まる種々様々の「改革」で、その結果、大学での一般教養教育のロシア語は、勢いがなく見えます。しかし、京都大学では、少数精鋭で大きな成果を挙げてきましたし、これからもそうであると確信しています。ロシア語は、誰もが学ばなければならないような言葉ではありませんが、誰かが学び続けるべき言語ではあります。

一般教養教育を担う教員組織の教養部は、大学内で、他学部の先生方からも、全学の学生諸君からも、総じて評判が良くありませんでした。教養部としては、立派な大人になって貰いたいがために、バランスの良い食事を提供しても、学生諸君や学部の先生方は「好きなものを好きなだけ食べたい」という風で、うまくかみ合わないことも多かったのです。私も、学生諸君の負担を軽くするようにと、到達目標を「高度(分厚い教科書)」、「標準」、「平易(薄い教科書)」の三段階に分けてクラスを設定したこともありましたが、ところが、到達レベルの希望などは無視して、取りやすい時間でしか選択しない。学生諸君は時間割を組む際に、結局、自分が空いているコマにしか入

れないのです。こちらの「親心」は実ることはありませんでした。

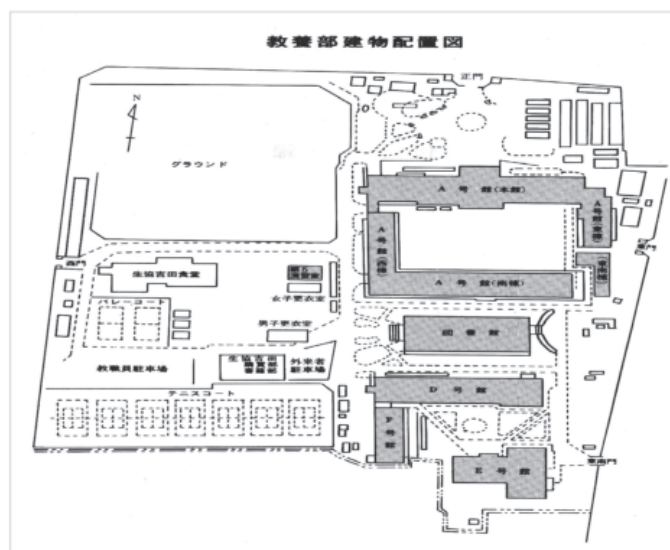
いずれにせよ、教養部の先生方の「思い」は伝わりにくく、大学内外からの大きな力で「改革」ばかりが繰り返されましたが、「京大の一回生、二回生」を現場で教えてきた先生方の知見、数値化が難しい経験の蓄積が、「改革」に活かされてこなかった気が強くして残念です。

着任当時、教養部という組織は、短期大学程度の予算しか交付されないと聞かされました。研究費も、建物の面積もしかりです。最初の研究室は、A号館南棟の一階で、もちろん、二人部屋でした。今の先生方には想像も難しいでしょうが、助教授は二人部屋が当たり前でした。A号館は、現在の総合館ですが、北棟はまだ無くて、旧制の第三高等学校の校舎の一部が残っていました。二番目の研究室はA号館南棟の四階です。そして、当然、二人部屋です。この南棟は、実は、新旧があり、西半分が古いのです。二番目の部屋は、古い方の部分でした。平成7年(1995年)の神戸の地震では、二、三のスチール本棚が根元で折れ曲がりました。この地震を契機に、旧教養部の建物の耐震補強が行われました。三番目の研究室はD号館の四階です。ここで初めて個人研究室となります。ただし、元来は講義室だったものを極めて簡便な「壁」で三つに仕切ったものだったので、古い民宿の襖で仕切られた客室のように、音は筒抜けでした。D号館は現在の2号館ですが、実験系の建物として作られたので、構造的に堅固でした。また、周囲は地学や物理の先生方が多く、パソコンや電気関係のことなど、日々、助けて貰えて本当に助かりました(この頃から、文科系の研究室でもパソコン、インターネット、LAN(まだ有線でした)の利用が本格化したので)。なお、耐震改裝などの前の建物では、電気はもちろん、水道、ガス、それにスチーム暖房が完備していて、「住み心地」は快適でした。またその頃、旧教養部の建物は、365日24時間、ほとんど施錠もされず、いつでも自由に研究に打ち込むことが可能でした。最後に、四番目、現

在の研究室は総合館北棟(昔のA号館で旧三高の校舎のあった場所に建てられた)四階です。明るくきれいな部屋ですが、水道が無い。ガスやスチーム暖房はともかく、水道のない研究室は困りものです。休日はしっかり施錠され、のみならず、365日24時間の多数の監視カメラ付きで、ご時勢を感じます。

最後に、これからを担われる特に若い世代の先生方に。「改革が繰り返されて、組織の名称等も変わり・・・」などという話が續くと、将来に不安を感じ萎縮してしまうかも知れませんが、落ち着いて考えると、そうは変わりません。私で言えば、一回生にロシア語の初歩を教える授業をする、委員会や会議に出る、自分の勉強・研究をして論文を書く、発表をして社会と連携する等、毎日のやるべき事は、昔も今も、変わりません。また、予算は減りましたが、今はお金を費やして外国の図書館までコピーを取りに行く必要もなく、ウェブ上の無料のPDFで先行研究が読めたりもします。それゆえ限られた予算でも、上手くピンポイントに集中して使えば、外国の研究者たちとの連携も容易で、昔より成果も上がります。「学生諸君と向き合って、授業をする」という本質は変わりません。むしろ、どんな時でも、特にご自身が困難に陥った時にこそ、学生諸君をよくご覧になってみて下さい。彼らの中にこそ「答え」があります。

(はっとり ふみあき)



ご退任を迎えられる先生方から

日本史授業四半世紀

元木 泰雄

(総合人間学部 国際文明学系／
人間・環境学研究科 共生文明学専攻)



2020年3月31日で、定年を迎えることになった。それ以降も、もちろん様々な形で京都大学とのご縁は続くが、授業の担当はこれで終わりとなる。総合人間学部にて助教

授として赴任したのが1997年4月、その前に非常勤講師として留学生センター、総合人間学部でも授業を行っていたから、京大で授業を担当した期間は四半世紀を超える。

京大に赴任してきたのは、京大入学から23年目であった。その時、総合人間学部の広報に、自身の専門分野を決めることになった、2回生で受講した上横手雅敬先生（現名誉教授）の『吾妻鏡』講読の思い出を中心に、「日本史修行四半世紀」という、自己紹介を兼ねた小文を記したことがある。それからさらに四半世紀を経て、定年を迎えるに際し、今度は教える側として、担当した授業の思い出等を記しておきたい。

20年余りの間、全学共通（一般教養）、学部、大学院、文学部・同研究科の学内非常勤等、多種多様の授業を担当し、大教室の授業も最低でも2コマは担当した。一日に3コマを設定するなどという、今から思えば無茶な時間割も組んだ。なるべく声を抑えて省力化を目指したが、どうしても興が乗ると力みが入って声を張り上げることは避けられず、おかげで、すっかり喉に変調をきたして

しまった。ここ一、二年は、授業の途中で水分補給が不可欠となり、さらには息切れして90分にわたり話し続けることさえも難しい有様。こうした劣化も、全力で授業を担当してきた「勲章」か、などと勝手に考えている。

京大の有難いところは、研究と授業がかなりの部分一体化していることである。様々な水準の学生を相手にする他大学の友人が羨ましがするのも、宜なるかなという感がある。学部・大学院関係の授業は、その時点で取り組んでいる専門研究を基本とした内容で、授業内容をそのまま書物、学術論文にすることができた。

むろん、そうであるがゆえに緊張させられることも多々あった。とくに将来の研究者を志向する諸君が多い大学院の授業・研究会は、全力で準備しなければならなかったし、また出席者から厳しい意見を投げかけられることも多かった。それが大きな刺激となったが、諸事にわたって思うに任せなくなったここ数年は、自身の老化、劣化を自覚させられる場になっていたことは否めない。

一方、日本史専攻以外の学生が大半を占める全学共通科目においては、もちろん研究内容をそのまま講義するわけにはゆかず、種々の工夫が必要となった。多くの学生にとって、社会に出る前に受講する最後の日本史の講義であり、彼らの歴史に対する認識を規定する可能性も高い。そこで、多少とも講義が彼らの心に残るように、二つの点に留意した。

第一点目は、高校までの、暗記を前提とした「日本史」との相違を明らかにして、学問としての「日本史学」を認識してもらうことである。教科書に書かれた結論を暗記するのではなく、そうした結論に至る過程を「考える」ことを重視した。むろん専門家相手ではないのだから、厳密な史料解釈や、学説の比較検討等は回避した。目指したのは歴史の臨場感と、構造的な把握である。歴史の流れや事件の結末を知っている我々は、それを当然のこと、必然的と考えてしまいがちである。しかし、現代でもなかなか先が読めないのと同様、歴史上の人物も際どい判断を余儀なくされたこと、同時にその成功が大きな社会変動と合致していることを伝えるように努めた。

その一例が、1180年における源頼朝の挙兵である。一介の流人に過ぎない頼朝が平氏打倒に成功したことを、通説は東国武士の多くは昔から源氏に従っており、頼朝は勝つべくして勝ったかのように説明する。しかし、それは無味乾燥な結果論に過ぎない。元々頼朝の腹心だった武士でも、「平氏打倒の挙兵は、富士山と背比べをするようなもの」と罵倒したとされる。武士たちの去就が不明確な中、頼朝は大きな不安に苛まれながら挙兵を決断したのである。

もちろん、その彼が成功した背景には、一族や家人ばかりを優遇した平氏政権に対する地方武士の不満の噴出があり、東国にいたがゆえに頼朝はそれを看取することができた。また、彼の勝利は敵の失策だけが原因ではない。頼朝は流人時代の在地における経験から、所領保全と拡大に対する武士の願望を知悉し、京で安穩に暮らす平氏が思いもよらない、本領安堵・新恩給与を創出したことが成功の原因であるといったことを説明した。

第二点目は、折角京都で学ぶのだから、京都という都市から歴史を体感してもらうことに留意した。学生たちは、修学旅行などで京都の名所を訪

れたこともあり、一通りの歴史は知っているだろう。そこで、個々の寺社の歴史を超えた京都の構造を紹介した。現在の京都の街並みも歴史の中で形成されたものである。たとえば、かつての平安京の左京は天皇の政治空間という聖域で、それ以外の地域とは異なる禁忌があった。そのことが、現在の京都における社寺の所在地を決めた面がある。古代の平安京が現代の京都を規定しているのである。ちなみに、わが京都大学は「左京区」に所在するが、実は本来は左京の外に位置する。

しかし、その平安京は中世に大きく改変された。たとえば、誰でも知っている京都御所は、なぜ本来の内裏と異なる現在の場所にあるのか。これが、鎌倉後期の両統分立で、持明院統の御所の所在地であったことを知る学生は少ない。逆に大内裏のあとは広大な荒地となり、明德の乱をはじめとする中世の合戦の舞台となり、ここに豊臣秀吉が最初の京の拠点である聚楽第を設けることになる。教科書でもなじみの事件と、毎日通る街並みが一体化し、時空を超えた歴史を体感してほしいと思った。

こうした授業を通して、学生諸君が歴史自体への関心と、学問としての歴史学に対する認識を深めてくれたなら幸いである。ある学生が、元木の授業は数学のようだと言ってくれた。むろん複雑すぎて理解困難というわけではなく、歴史とは論理的に解明するものと認識したというのである。文系のみならず、理系の諸君に熱心な受講者が多かったこともこのためかもしれない。こうした学生が現れたことは、本当の意味で「勲章」なのだろう。

(もとき やすお)

ご退任を迎えられる先生方から

魔法の世界を出ていく私

水野 眞理

(総合人間学部 国際文明学系／

人間・環境学研究科 共生文明学専攻)



朝は四本足、昼は二本足、夕方は三本足で歩くもの、なーんだ？これはよく知られたなぞなぞであり、答えはもちろん、人間、である。しかし、これはギリシア神話の人

面獣身の怪獣スフィンクスが通りかかる人々に出していた謎である、ということはあまり知られていない。

この謎に答えられない人々たちはスフィンクスに喰われていた。それを初めて解いたのがオイディプスであり、これによってスフィンクスは死に、その一帯はスフィンクスの害から救われたという。オイディプスはテーバイの王ラーイオスの子であったが、「ラーイオスが息子を持てば自らの父を殺し母と交わることになる」という予言の成就を恐れた父によって赤子のうちに捨てられたために、自らの出自を知らなかった。そしてスフィンクスに遭遇する直前、オイディプスはそれと知らず父を殺害していた。彼はスフィンクスから町を解放した功績により、テーバイ王の地位につき、ラーイオスの遺した妃イオカステすなわち自らの母の再婚相手となってしまう。この近親相姦はのちにテーバイの町に災厄をもたらすことになる。災厄の原因を探るうちに事の真相を知ったオイディプスは自ら両目を潰して盲目の乞食となり、娘とともに放浪の旅に出て、最後はコロノスの森で命を閉じる。紀元前5世紀のソフォクレスが二つの悲劇『オイディプス王』、『コロノスのオイディ

プス』で描いたのはこの物語であった。

「四本足」の赤子のうちに捨てられたオイディプスはコロノスに達したときには老人、すなわち杖をつく「三本足」となっており、彼もまた自ら解いた謎に従って「人間」としての生を終える。文学・美術作品では、杖はしばしば老いの象徴として用いられてきた。私自身は今のところまだ杖を用いるには至っていないが、いずれその助けを必要とするときがくるだろう。退職を前にすると、今まで何の関心もなかったものに妙に興味を湧く。

「杖」と日本語で言っているものには、英語では用途に応じて多くの語がある。老人が歩行の補助具として用いるものは(walking)stick または staff である。staff はさらに、羊飼いが羊を扱うのに使う柄の湾曲した牧杖、魔術師が使う杖の意味も持つ。補助具でなく装身具として紳士が持ち歩くステッキも walking stick であり、籐製のものは cane と呼ばれる。よくしなる cane は、かつて英国のパブリックスクールなどで教師が生徒に罰を与えるのに用いられた。尻とか、掌を上に向けたところを叩くのはまだましなほうで、掌を下に向けて手の甲を叩くというひどい話をパブリックスクール出身者の外国人教師から聞いた。旧約聖書に現れる長老や、宮廷の役人が持つ権威の杖は rod あるいは wand と呼ばれている。これらは cane と同様、罰を与える道具を指すこともある。しかし、現代において wand といえば、主に魔法使いの短い杖を指している。このように英語で多くの語があるのは、ヨーロッパ社会で棒状のものがさまざ

まな機能を—物理的、象徴的を問わず—持ってきたからであろう。棒切れは簡単に手に入り、人間の歴史のごく早い時期から多様な用途に使える道具の一つだったのだろう。共通して杖は、ときには弱さを補い、ときには本人の能力を超えた力を与えて他人を支配させるなど、人間の力を補完・増強してきた。

文学の世界では光彩を放つ杖がいくつもある。シェイクスピアの最晩年の劇『あらし』(1612 ごろ)では、弟にミラノ大公の地位を篡奪されたプロスペローが絶海の孤島で魔法の力を身に着けるが、嵐によって漂着した弟への復讐を思いとどまって赦すことを選ぶ。結末近くでプロスペローは魔法の杖 (staff) を折って地中深く埋め、魔術書を海に沈める。魔法の放棄はまた、芝居といういわば魔法の世界に身をゆだねてきた観客に対し、その終わりを告げる比喻でもある。シェイクスピアこそがこの魔法を仕掛けた魔術師であったのだ。どの作品にもまして、主人公が劇作家自身を思わせる存在であるために、杖を折るプロスペローは劇作に別れを告げる晩年のシェイクスピアの自画像だ、という解釈もなされている。

タンホイザー伝説に基づくワーグナーの楽劇『タンホイザー』(1845)では、ヴェーヌスとの快楽に溺れた騎士タンホイザーが罪を悔いてローマに巡礼し教皇の赦しを求めるが、教皇は、タンホイザーの罪は重すぎて「わが手中の杖 (Stab) が二度と緑に芽吹くことがないのと同じく、地獄の業火からの救済がお前に芽吹くことはない」と言い放つ。絶望のうちに戻ったタンホイザーが息を引き取ったところへ、ローマからの使節が緑の芽を吹いた教皇の杖をもたらし彼が許されたことを告げる。聖職者は絵画などでしばしば杖を持った姿に描かれるが、それは信徒=羊、聖職者=羊飼という比喻の視覚表現である。これに加えて、神と人間の仲介者である教皇の杖は神の意志を代行する権威の象徴でもあろう。タンホイザーの忠実な恋人エリザベートの自己犠牲に神が答えて彼

の救済がもたらされたことを杖が示す結末は、清く美しい。

『ハリー・ポッターと賢者の石』(1997 シリーズ第一巻)で、ハリーは魔法学校への入学準備のため杖 (wand) の店を訪れる。2002 年以降リリースされたシリーズの映画版では杖はたいてい 30cm 程度の長さで、呪文を唱えつつ振るときに手から抜け落ちにくいようにオーケストラの指揮棒のように先細りの形に作られている。このシリーズの人気のせいで、今や我々は、魔術師の杖とはこういう形だと思い込んでいる。杖作りで店主のオリヴァンダーが言う。杖は人がそれを選ぶのではなく「杖が魔術師を選ぶ」のだと。実際、ハリーが最初に使う杖は彼の登場を待っていたといえる。芯に不死鳥の羽毛を持つ点が「兄弟杖」であるヴォルデモートの杖と共通しており、ハリーがヴォルデモートから与えられた額の刻印とともに、ハリーが戦うべきものは彼の内にあることを示している。杖は魔術師との間に臣従関係 (allegiance) を持つ。シリーズ後半でハリーは宿敵ドラコ・マルフォイから杖を取り上げ、ドラコの杖はハリーに臣従するようになる。校長ダンブルドアが生前用いた杖はヴォルデモートに入手されるが、その臣従関係がドラコを経由してハリーへと移っていたために、ヴォルデモートはその杖でハリーを傷つけることはできず、逆に杖の魔力によって自滅する。登場人物が物語を動かしているようでありながら、実は一見小道具にすぎない杖が要所所で物語を方向付ける。

人環に在職中は多くの人々に助けられてきた。その意味で私は最初から杖に支えられてきたのだ。杖が私を選んでくれたことに大いに感謝しつつ、これを若い世代に譲って私は人環という魔法の世界を出ていく。そして京大教授、という杖なしに「マグル」となって、もう一度世界を生き直す。

(みずの まり)

ご退任を迎えられる先生方から

ダジャレの人類学

宮川 禎一

(人間・環境学研究科 共生文明学専攻／
京都国立博物館 上席研究員)



最近はやりの某放送局の番組「〇〇ちゃんに叱られる！」を面白いのでよく見ている。ある放送で「オヤジはなぜオヤジギャグを言うのか？」とかいうテーマをオヤジの

立場で見ていたら「中年になると、恥ずかしい気持ち失せてきて、50代後半の男性の自制心は小学校5年生男子と同じくらいだから～！」という結論にいたく感心した。

オヤジギャグの代表は「そんなバナナ！」などのダジャレなのだが、男性はともかく、女性がそんなことを言っているのを見たことがない（心で思っているけども言わないだけなのではないでしょうか）。オヤジが飲み屋で集まってオヤジギャグを連発しながら同席する若者たちのうんざりする顔をサカナにますます飲んじゃうのであるが、なにゆえオヤジは自分のオヤジギャグに自分で喜んでいるのだろうか？

その番組を見た後、文学部博物館学の講義中の小レポートのいちばん最後の設問に「いま思いついたダジャレを三つくらい書きなさい」と受講生たちに出したところ、男子学生たちは嬉々として挑戦的な作品を多数書いてきた。それも専門用語を駆使した高度なものだ。おそらく自分の研究室でそんなことを言うと先生や先輩に軽蔑されると思って心に秘めていたものを、専門とは無関係な

博物館学の授業でようやく披露したのではなかろうか。それに対して、女子学生の多くは苦悶の表情で「先生、勘弁して下さい」と言って、書いて出さない学生が多かったのが興味深い。熊本県出身の女子学生は筆者に促されたあげく「山鹿に山がある」とひとつだけ書いてきたのが印象的だ。このようなダジャレに対する男女間の差異がいったい何に由来するのか、脳内が専門ではないものの深い意味がありそうだ。

脳内言語野の整理具合とダジャレの関係を何かの本で読んだ気がする（出典をあげずに済みません）。多くの女性の言語野ではバナナは食べ物の棚に整理されており、バナナの隣にはリンゴやマンゴーも整理されている。きちんと整理された台所や分類の完璧な図書館の書架のようなものだ。「食べ物」の棚と「悪口」などの語彙を入れた棚は遠く離れているのだ。そのために頭の中がきちんと整理された人は「バナナ」と「バカな！」をかけ合せて「そんなバナナ！」などとは思いつかないらしい。

一方、オヤジである筆者の脳内は自分の研究機のようにさまざまなテーマがごっちゃに山積みであり、傍から見れば「そんなんで研究できますのん？」という混乱ぶりだ。それはかつて筆者が学生時代に奈良国立文化財研究所の佐原眞先生の研究室が山積みの資料でグチャグチャ（先史考古学の先生なので佐原貝塚と呼ばれていた）なのを見て「ああこれが佐原眞大先生のユニークで多彩な

研究の元なのか。真似しようっと」などと思ったから（自分が片付けられない言い訳ですが）である。

すなわち部屋や机を片付けられないオヤジの脳内の言語領域もまた「きちんと整理はされていない」がゆえにバナナ！とバカな！は意外に近いのだと。

このようなダジャレやオヤジギャグは何の役にも立たない言葉あそびに見えてそこに人類進化の大きなカギがあるような気がする。発想の飛躍とも言う。

中年男性がニヤニヤしながらオヤジギャグを披露するとき、オヤジの脳内には「いい思い付きだ！是非とも今言わなきゃ！」という快感物質が湧き出ているのだ。こんなことを言って軽蔑されるんじゃないかなどという自制心をはるかに上回る発言衝動があるのだ。思い当たる方もいらっしゃるであろう。

この場合、お笑い番組で芸人さんが言っていた面白いギャグを拝借してその場を沸かせたとしても決して嬉しくはない。むしろ後ろめたい。今、この時、その場で自分自身が思いついたオリジナルのダジャレこそが述べて嬉しい。なぜこれが快感なのか。脳内のご褒美が何ゆえ「新作のダジャレ」ごときに与えられるのか。

たとえば好意を抱いている異性からの愛の告白はなんだかんだ人類の子孫繁栄に寄与しているので嬉しいのはよく分る。しかし、一見無意味なように見える「自分で考えついたダジャレを自分で嬉しく思うメカニズム」にも人類的な意味があると思う。ダジャレの行き着く先に人類の進化・発見・発明があるのだと考えてはどうだろうか。科学的な発見もそんな場合が多々あるだろうし、文系の研究にも当てはまるだろう。人類の進化進歩につながる「よい発想」に自分の脳内でご褒美が与えられるのだ。だから嬉しいし、すぐに発表したくなる。歴史史料を読んでいいるうちに「あれは

そういう意味だったのか！ここにヒントが書いてあるやん！すぐ書こう！」というような「頭の中で電球がピカッと点灯するあの瞬間」の快感と同じものだと思う。

たとえば遠州掛川城（静岡県）と土佐高知城は「天守閣から見える周囲の景色が良く似ている」などは学問的なダジャレだ。関ヶ原以後に掛川から土佐に入部した山内家が長曾我部氏の岡豊城や浦戸城ではなく「河内」すなわち「高知」に新たに城郭を構える際に、遠州掛川城の周辺に見える景色に似た地形を選んだのではないかと思う話だ。私が山内家の家臣なら掛川の風景に似た場所にまた城を築くのでは？との思い付きだ。

ふり返れば筆者の研究にはこのようなものが多い。なぜそう思い至ったのか。自分の中の歴史に関係があるだろう。昔読んで疑問だったあの本のあそこと、今、目の前の史料のこの部分のこれって関係あるやんとかだ。壮大なダジャレだ。

この文章は教員の方も読まれるものだが、学問は「コツコツやる」のと「大胆に飛躍する」との両輪だ。ダジャレばかり得意で落ち着きのない学生には「君は発想が面白いのは良いところだが、ちゃんとデータを集めて、きちんと整理しなさい」と指導すべきだし、コツコツやっている真面目な学生には「あなたは資料集めとその整理が手堅いのは素晴らしい。でもたまにはお笑い番組も見なさい」と声をかけるのが良いと思う。

（みやかわ ていいち）

新任の先生方より

トラウマに対処する



皆さんは、ボルドーをご存知でしょうか？ フランス南西部、パリから電車で2～3時間のところにあります。大西洋がそばにあり、そこで収穫される素晴らしい生ガキ

を、私たちは冬によく賞味します。名産のワインとともに。私の家族はみんなボルドー地方出身です。私はボルドーで育ち、心理学を学び、2005年から2011年まで臨床心理士として勤務しました。2011年から2017年までは、博士課程の研究、そしてポストドク研究のために京都大学人文科学研究所に所属しておりました。

私のキャリアには重大な時期がありました。2003年、私はボルドーの小児科病院の小児神経科で、心理学修士1年生のための実習に参加していました。回診は火曜日の朝に行われていました。医師、看護師、および数人の学生から成るチームが、各患者の部屋に入る前にドアの前に集合します。ある時、私たちはドアの前で重大な検査結果が届くのを待っていました。生後五か月の赤ちゃんが両親によって病院に連れて来られていました。両親は彼があまりに活気がないと思ったのです。私たちは立ち尽くしていました。部屋のドアは閉められたままです。いくつかの文書が届き、主治医に渡され、彼はそれらに目を通します。突

TAJAN, Nicolas Pierre

(総合人間学部 人間科学系／

人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

如、彼は真っ青になり、書類から目を離し、視線を泳がせました。彼は文書をインターンに手渡します。「この子どもはウエルドニッヒ・ホフマン症です。彼は、数ヶ月以内に亡くなります。ここは大学病院なので、学生は勉強する義務がありますから、今回は小グループで部屋に入りましょう。インターン、臨床心理士、そして実習生は来て下さい」。実習生とは私のことでした。私はあのときのことを決して忘れません。私たちは、子どもが死ぬ時のあの寒々とした恐怖に慣れてしまうようなことは決してないでしょう。

私の研究であるトラウマと孤独（ひきこもりも含む）についてお話ししましょう。この二つの概念を鍵に、思想史、精神病理学、精神分析における私の研究に取り組んでいます。人類の黎明期以来、私たち言葉を話す存在は、傷や喪失といったものに対処しなくてはなりませんでした。ジークムント・フロイトやジャック・ラカンを引き受けつつ、私の研究の独創性は、次のことを明確にすることにあります。トラウマに対するレジリエンス（回復力）は、文明の過程に内在する一つの構成要素である。言い換えれば、喪失や傷は、人間の人生において避けて通ることのできない要素であり、私たちがそれらを洗練させるやり方こそが、人としての進歩、文明の進展に寄与するということです。

(タジャン ニコラ ピエール)

新任の先生方より

(自己紹介に代えまして) ～理論と実験の両輪で科学する～

松永 利之

(人間・環境学研究科 相関環境学専攻)



A君に借りのあるBさんが言った。3つの逆さまにした湯飲みのうち、1つだけレアものの金貨が隠されている。一回で当てたらその金貨を差し上げよう。A君は1つの湯飲みを選択した。するとBさんは残りの湯飲みのうち、空の湯飲みを一つ開けて見せてくれた。Bさん曰く、今なら、選択した湯飲みを残ったもう一つに変更することができる。さて、その金貨をどうしても手に入りたいA君は選択肢を変更すべきか否か。そう、これはよく知られたモンティ・ホールの問題である。直感的には変えても変えなくても当たる確率は、等しく、1/2であるように思える。大抵の人(失礼しました)は、最初の選択を信じて変更しないであろうが、ところが実際は変更した方が良く、当たる確率が二倍に上がる。その理由については、様々な説明がなされているが、私は次のように理解している。全ての湯飲みについて当たる確率は1/3、A君が湯飲みを一つ選び、そして選択肢を変更しなければ、均等に1/3の当たり確率を持った残りの二つはBさんの手の中にあり、A君が一つの湯飲みしか開けることができないのに対し、Bさんは二つの湯飲みを開けることができると考えれば、取り敢えず納得できる。これを確認するためには何度も実験を繰り返してみればよい。実験の都度、毎回必ず選択肢を変更することによって徐々に2倍の確率に収束していくのであろう。既にモンテカルロ法を用いたコンピューターシミュレーションによって証明されているようである。私も春日井優氏作成のシミュレーションプログラム[1]を用い検討を行った。結果を表に示す。この

例では湯飲みは3つであるが、湯飲みが4つでBさんが空の湯飲みを2つ開けてくれたならば、湯飲みを変更することによって当たる確率は3倍に上がると考えられる。早速、実験によって確認することができた(10000回試行で、変更して当たり／変更しないで当たり：7523／2477、二回目：7573／2427、三回目：7477／2523、…)。これらの考察及びシミュレーションは正に科学的手法を実践しているといえる。つまり、科学は、観察、実験を通して研究を行い、仮説を実証してゆき、そして万人を納得させる学問とされているからである。モンティ・ホール問題は、実験の重要性をととても良く物語っている。

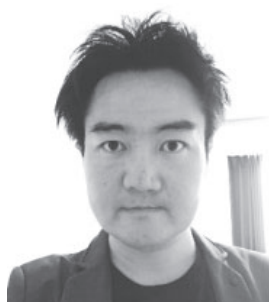
試行回数	変更して当たり	変更しないで当たり
10	6	4
	8	2
	7	3
	...	...
100	71	29
	67	33
	62	38
	...	...
1000	689	311
	669	331
	648	352
	...	...
10000	6632	3368
	6720	3280
	6633	3367
	...	...

[1] <https://joho-ka.mints.ne.jp/monty-hall-problem-in-excel>

(まつなが としゆき)

新任の先生方より

化学でアートする



2018年10月1日より京都大学白眉センターにて特定助教として赴任し、2019年6月より本研究科の小松直樹教授に受入れ先となっていただきました。私は高校卒業後、単身でアメリカに渡り、

ELS Language Centers (San Francisco CA, Cleveland OH, Riverside, NY), Lorain County Community College (Elyria, Ohio) から State University of New York at Buffalo へ編入し B.S. Medicinal Chemistry, *with summa cum laude* を卒業した後、University of Michigan, Ann Arbor にて、Ph.D. Chemistry を修了しました。その後、University of California, San Diego にて2016年まで3年間ポストドクターとして勤務し、約15年間のアメリカ生活を終え帰国しました。日本では、ベンチャー企業にて1年ほど勤務した後、東京工業大学生命理工学院、京都大学大学院医学研究科を経て現在の立場となっています。そのため、日本でのアカデミックのキャリアは短く、また日本の大学で学生として在籍したこともなかったことから、とても楽しく新鮮な毎日を過ごさせて頂いております。

留学のきっかけは、幼少期から絵を描くことやものを作ることが得意で、どうせアートをやるならアメリカで！と考え、思い立ったが吉日(?)、それから2ヶ月後に単身渡米しました。大学での一般教養にて化学を学ぶうちに「宇宙は自然が作り出したアート」と考えるようになり、特にナノスケールの世界で、まさにアート作品を創り上げる化学に強く惹かれ、化学者の道を志しました。それ以来、現在に至るまで「化学でアートする」と

鈴木 雄太

(人間・環境学研究科 学際教育研究部／
白眉センター)

いう独自の視点を大切にして研究を推進してきました。この視点があったからこそ、ポストドクター時代にタンパク質をベースとした独創的かつ革新的なマテリアルの創成 (*Nature* 及び *Nat. Chem.* に掲載) に成功したと考えています。現在は、この研究分野 (Protein Design & Engineering) を進化・発展させるべく、白眉研究者としてのテーマに掲げている“タンパク質デザインによるバイオナノロボットの創生”を目指し研究を推進していきたいと考えています。

所属先の白眉センターでは教育の義務はありませんが、大学院時代に学部生の授業および学部生・大学院生のメンター、ポスドクにおいても学部生・大学院生のメンターをしていたこともあり、教育にも興味がありました。そこで、藤田健一教授、小松直樹教授をはじめとする先生方のご厚意で、講義を分担させていただく形で教育に携わる機会を頂くことが出来、大変嬉しく思っております。さらに、受入れ教員である小松教授のみならず、土屋徹准教授にも研究に対してアドバイスをいただくなど、既に本研究科の先生方と交流させて頂いております。白眉センターの元プログラムマネージャーであり、本研究科の研究科長でもあられた堀智孝名誉教授より、「人間・環境学研究科は白眉と同じで異分野の先生、学生と議論できるとても貴重な場所である」と伺いました。私自身もそのような機会を持てることを楽しみにしております。私の研究やこれまでのキャリア等でご興味を抱かれた方がいらっしゃいましたら、ぜひお声がけ (メール) いただけますと幸いです。

(すずき ゆうた)

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第64号をお届けいたします。今号ではこの3月末日をもって退任される7人の先生、そして昨年中に着任された新任の先生3人からご挨拶を頂戴しました。ご退任を迎えられる先生方それぞれの個性あふれる文章には、総人・人環の知的空間の豊穡さをいまさらながら実感させられました。長年に渡るご尽力に心から感謝申し上げますとともに、先生方の今後の益々のご活躍を祈念いたします。

(O. I)



ゼミ風景

北棟の研究室



名誉教授の上横手先生と一緒している研究会にて



ビューリツァー賞受賞者 Megan Marshall 教授をお招きして



フラスカーティにて 2015年3月3日



チャト (チャトラン)



韓国茶道協会にて伝統服をまとい
2018年3月12日

総合人間学部
人間・環境学研究科

広報委員会